

科学研究費助成事業（基盤研究（S））研究進捗評価

課題番号	23221012	研究期間	平成23年度～平成27年度
研究課題名	アフリカの潜在力を活用した紛争解決と共生の実現に関する総合的 地域研究	研究代表者 (所属・職) <small>(平成28年3月現在)</small>	太田 至 (京都大学・アフリカ地 域研究資料センター・教授)

【平成26年度 研究進捗評価結果】

評価	評価基準	
A+	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる	
○	A	当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
	A-	当初目標に向けて概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である
	B	当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C	当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である
(意見等)		
<p>本研究は、アフリカの「紛争解決と共生」という課題に、「アフリカの潜在力」の検討を通して問題解決の可能性を切り拓く研究であり、その概念の理論的検討や在り地での共通理解の形成に重要な進展が見られ、研究は順調である。</p> <p>毎年度アフリカ主要地域での研究者と実務家を加えたフォーラムの開催は理論の精査と実践的課題への理解を深める斬新な試みであり、並行して日本での国際シンポジウム開催及び国際学会セッションへの参加によって、質の高い個別論文や研究組織としての統一性を示す『アフリカ紛争・共生データアーカイブ』や『African Potentials 2013』の共同成果も見られ、当初の計画に沿って順調に進行している。今後の研究及び成果の計画も周到に準備しており、国際的な評価に耐えうる成果が期待できる。</p>		

【平成28年度 検証結果】

検証結果	当初目標に対し、期待どおりの成果があった。
A	<p>本研究は、アフリカにおける紛争の実例やローカルな紛争解決に関する実践・実例の調査研究を通じて、紛争解決と共生の実現のためにアフリカが寄与しうる潜在的な可能性を明らかにしようとするものである。</p> <p>研究期間を通じて、紛争が国際関係や国家の政策、集団間の利益など、複雑な対立・共闘関係を示していること、紛争解決に関して小規模な集会やその場でのプレゼンテーション、折衝、和解を演出する儀礼などが有効に機能していることなどを指摘し、アフリカが外部との接触の過程を通じてインターフェース機能を生成してきたことを明確に示した。</p> <p>アフリカ各地で開催された計5回の「アフリカ紛争・共生フォーラム」、計2回の国際シンポジウムをはじめ、諸学会での発表、「アフリカ潜在力シリーズ」全5巻など、期待どおりの成果を上げた。英語での発信も積極的に行われており、国際的な評価に耐えうる研究活動を展開したと評価される。</p>